

# 文學

隔月刊 第14卷・第1号

1,2月号

2013 岩波書店

森鷗外の諸相  
特集 II

- ロマンティケル鷗外の出発——「調高矣洋絃一曲」を中心に…………須田喜代次  
「利他」という思想——鷗外文学における Seele のゆくえ…………松村友視  
森鷗外と雑誌『精神』——「展覧会評」「即興詩人」の掲載をめぐって…………宗像和重  
森鷗外「うたかたの記」論——「われ知らず」と〈狂〉…………小林幸夫  
森鷗外のドイツ観劇体験——日本近代劇の紀元…………金子幸代  
接続する「神話」——「天皇族実録」「日本神話」「北条霞亭」…………村上祐紀  
松木博／古郡康人／出原隆俊／酒井敏  
竹内栄美子／ベアーテ・ヴォンデ
- 
- モリエール『タルチュフ』の謎…………秋山伸子  
【文学のひろば】竹盛天雄

## 出版のご案内

森川 昭

## 下里知足の文事の研究 第一部

## 日記篇

「近世初中期を生きた地方知識人の三十七年間に亘る日記の全文を翻刻・公開」

歴史・文学・文化史  
民俗学等の基礎資料紙背文書  
に西鶴書

簡出現

A5上製・貼函入・上下冊総一一四八頁  
新刊・24150円内  
容  
目  
次上冊 序文 下郷君雄 / 下里知足日記  
寛文八年～貞享三年下冊 下里知足日記 貞享四年～元禄  
十七年～鳴海下里家系図 / 大垣下里家  
系図 / 桑名伊藤家系図 / 鳴海寺嶋家系  
図 / 主要人物一覧 / 鳴海略図 / 鳴海の  
行政 /あとがき

続刊 第二部 論文篇 / 第三部 年表篇

## 宮本輝書誌 II

## ◎推薦 働業に脱帽（浦西和彦）

二瓶浩明

前著

『宮本輝書誌』

に

続

く、一九九一

年から二〇一二年までの文学活動を追

及・記録。著書『著作年表』『関連

事項』『年譜』『索引』を完備した『思

考』するための書誌。

（内容目次）I 著書（單行本・文庫本）/

II 著作年表（初出目録）一九九一年～

の貴重な資料

点

大阪史談会の創立

／『思ひ出の記』（代遺稿）／『古典聚

目』（第百号発刊）（抄）（三代日記他

挨拶）／『餘霞日記』（抄）（二代日記他

上文庫最新刊

39・2625円

洋

・舞台化作品など／参考文献目録／

IV 年譜／V 索引（小説・随筆・対談・

談話／人物）／新刊／13650円

好評既刊 宮本輝書誌

94500円

まで）／編集後記

中村理絵／延慶

秀幸／延慶本／平家物語

院田中裕紀／賢王高倉帝と亡母追

善小林加代子／源平盛衰記と寺門派追

修驗源健一郎／源平盛衰記の住吉明

辻本恭子／源平盛衰記』『觸體

尼村語』の展開浜畑圭吾／首を

めぐる言説久保勇／慈光寺首承久

記「卷末記事」の諸問題武久堅／

形容詞「うたてし」の語義池田敬子／

平記秘伝理尽鉄』における楠木正成

死山本晋平／『梅松論』の政治性

北村昌幸／芳野本『義経記』試論

森田貴之／『太

村知子／白拍子静の鎌倉下向藪本勝西

死山本晋平／『梅松論』の政治性

北村昌

## つれづれなるままに——ベルリン森鷗外記念館と記念のかたち<sup>(1)</sup>

ベアーテ・ヴァンデ

これからベルリン森鷗外記念館のことを、他の施設と比較してお話ししますが、どうか自画自賛とおとりにならないでください。最初に申し上げたいのは、森鷗外は、ドイツを再訪することがなかったにもかかわらず、最古参にして永年勤続の、日本の、いえアジアの「駐独文化大使」<sup>(2)</sup>として比類ない位置を占めているということなのです。

ベルリン森鷗外記念館は、一人の日本人のために、日本以外の国の組織、すなわちフンボルト大学(かつてのベルリン大学)の資金で運営されている、唯一の記念館です。ロンドンの夏目漱石博物館は民間によって管理され、講演会を毎月行ったり、特別展、イベントを開催することはありますし、開館日も二月から九月の週三日に限られています。リトニアのカウナスにある「杉原ハウス」はホロコーストを生き延びた人々の子孫の寄付で成り立っています。

私たちが大学の施設であるのには、歴史的な理由がありま

す。この大学は明治時代の日本人エリートたちのドイツにおける母校なのです。ですから、鷗外のぬきんでた多面的な才能に象徴される、またとない日独間の学術・文化交流をベルリンの中心部で記憶し続けることを、私どもの責務としています。明治時代には七四七名の日本人留学生がベルリン大学に正式な入学手続きをしています。この中に鷗外と北里柴三郎は入っていません。二人とも日本で大学教育を修了し、ロベルト・コッホのもとに個人的に契約していたのです<sup>(3)</sup>。しかし、私たちは、この二人も、その他の正式な手続きはせずに受講した人々(非正規の学生も含めると、日本人留学生の数は二倍になります)も、わが大学にルーツを持つ学生たちだと考えています。

もう一つ特別なことがあります。私たちの記念館は、みなさまから見て、外国にあるというだけではなく、二つの国家(あるいは体制)の中に、しかし同一の場所に、あり続けたとい

うことです。ベルリン森鷗外記念館は一九八四年<sup>(4)</sup>の旧東ドイツにおいて、日本学者・翻訳家であったユルゲン・ベルント教授により、日本の鷗外記念会と、東ドイツの文化同盟、東独日本文化協会<sup>(5)</sup>の協力を経て設立され、激しい存続のための奮闘のあと、学術性をより高めたコンセプトのもとに、統一ドイツに引き継がれることができました。とはいっても、記念館存続のための戦いをいつまた始めねばならないかは誰にも分かりません。確実なことは何一つありません。このことだけは、たゆまず言い続けねばなりません。

本来なら難しいのは承知の上ですので、あえて仮説として提案しますが、東京大学とフンボルト大学のパートナー施設として、明治のお雇い外国人であつたドイツ人の記念館のようなものがあり、施設の人的資源をより充実できるならば、協力関係を結んで共同の研究プログラムを行い、学術交流をするということがあってもよいでしょう。そうすれば大学レベルでの交流が今より豊かになるのではないかでしょう。しかし現実はそうではなく、鷗外記念館でさえ東京、津和野、北九州、ベルリンそれぞれが別の組織によって運営されているので、どんなにお互いの交流が良いものでも、コンピュータ用語でいえば、互換性の問題が生じています。それは、言葉の問題や対象とする人々が異なるといった問題を除いたとしても、です。私たちは日本人旅行客の観光スポットになることを、第一の目標に掲げているわけではありません。もちろん、お客様の訪問を記念館は歓迎していますが、私たちの役目はま

ず、フンボルト大学に所属する機関として、ドイツに住む人々に、鷗外の作品と魂、彼が生きた時代のチャンスと葛藤について伝えることであり、実り多き知的な交流を、歴史的な模範として研究することなのです。

前述のように、私どもはドイツで唯一つの外国人の記念館で、したがって国内でもどこか独特な存在です<sup>(6)</sup>。ロシアの作家マキシム・ゴーリキーが住んでいたベルリン近郊の建物には、東ドイツ時代に記念館がありましたが、現在はもうありません。今はその建物の中の部屋を借りたり、宿泊することもできます。その収入で建物だけはかろうじて維持されています。あまり知られていないことです。アメリカの作家チャールズ・ブコウスキはドイツ生まれです。ドイツのブコウスキ協会は彼の故郷のアンデルナハに文学館を建てることを一〇年前から計画していますが、維持管理の為の資金の問題で挫折を繰り返しています。フィリピン大使館は二〇年来、国民的英雄であるホセ・リサールがベルリンで暮らした家にリサール・センターを建てようと試みていますが、まだ実現には至っていません。

世界文学の大作家の多くが、かなり長くドイツをはじめヨーロッパ各国に滞在していますが、ツルゲーネフの文学館もチエーホフの文学館もありません。開館を大々的に祝った後、どのようにして何十年も施設を維持し、経費をまかなうかという問題に対しても、今日では肩をすくめる以外の答はまず得られません。

あるいはまたラビンドラナート・タガールを例にとってみましょう。一九一三年度ノーベル文学賞を受賞したインドの詩人です。去年、インド政府がスポンサーになって、生誕一五〇年を記念する大規模な展覧会がベルリンのアジア博物館で開催されました。タガールは鷗外と違つてドイツをたびたび訪れ、同時代のドイツ文学に、アジアのほかの文学者には及びもつかない、後々まで続く影響を与えました。ヘルマン・ヘッセ、シュテファン・ツヴァイク、ライナー・マリア・リルケなどが彼を師と仰いで、その作品を翻訳し、印度を旅し、その影響下に仏教に心を向けました。でも、ドイツにタガール記念館はありません。

業績を残した人の記念碑や記念館は、ドイツに数多く存在していると思われるでしょう。ところが、そうではありません。幾つかの物語は箱に入ったまま公開されることもありません。幾つかの物語は一度人々に忘れられ、再発見されない限り、日の目を見られないのかもしれません。

ですから、記念日に見学できる史跡や記念館が存在していることを、喜ばなくてはなりません。

鷗外はあれだけの功績があったにもかかわらず爵位を受けていません。私は「でもその代わり、日本だけでも三つ、遠いベルリンにもう一つ、記念館があるじゃないか」とひそかにうれしく思っています。ベルリン森鷗外記念館は、設備や広さにおいては日本の文学館の多くに劣りますが、天皇陛下と皇后陛下（一九九三年。正確には、大学本館での展示ご見学、皇子殿下（二〇一二年）や、中曾根元総理大臣（一九八七年）、ドイツ連邦元大統領ローマン・ヘルツォーク（一九九七年）といった方々も訪問しています。これは鷗外の死後も保たれている榮誉です。そしてネットワークが国内だけに留まらず、これまでに国際的に広がっている例を、鷗外以外に知りません。

記念館とは、自分のアイデンティティと文化にとって特に大切な場所、イギリスでは文化遺産（Cultural Heritage site）と呼ばれて、本来、国家によって保護されることになっているもののです。最近ロシアの鷗外研究者G・D・イヴァノヴァによる「鷗外伝」（一九八二年刊行）の訳が手に入ったので、しばらくとページをめくってみたところ、現代にも当てはま

るこのような一文が目に止まつたので紹介します。「鷗外全集」全三八巻は「近代日本文学の金準備に値する」というのです。つまり鷗外の作品は一冊一冊が金の延べ棒のようになります。この全世界的金融危機の時代にこそ、精神的な金準備である鷗外の世界をたぐいない遺産として高く評価し、さらに研究を深め、活用してゆくべきでしょう。

私たちはイベント文化の時代に生きています。文学者の記念日にもたいてい、珍しいイベントが数々催され、世間の注目がその文学者に集まります。けれどもメディアがひとしきり盛り上げたとは、また静まり返ってしまいます。

記念日は記念館にとっても重要です。鷗外獨一〇〇周年なくしては、ベルリン森鷗外記念館は出来ませんでした。そして鷗外生誕一五〇周年には、東京森鷗外記念館がリニューアルオープンされました。記念館は、その日暮らしではあります。記念文化という意味でも、鷗外の場合であれば日独関係という意味でも、持続を本質としています。研究所や図書館と連携して働く専門知識のセンターです。そのノウハウはそれぞれの土地が生み出した作品を越えて広がってゆきます。私どものところに、日本についての質問、あるいは日本人からドイツについての質問、森鷗外は何のかかわりもない問い合わせが、どれほどたくさん寄せられるか、とても皆さまにはご想像できないでしょう。鷗外が、何であれドイツ問題の判断を求められたように、私どものところには「日本

のすべて」が揃っているものと思われていて、眞の専門知識を提供するには、それなりのスタッフ体制が必要なことは、言うまでもありません。  
文学記念館の一番大きな役割は、いつでもここにあること、そしてつねに新鮮なアイデアで、地域住民に何度も足を運んでもらい、そこに記念されている文学学者と今日の我々の生活との深い関わりを示さねばならないことです。森鷗外について、加藤周一は「三〇年を超える著作活動において……近代文化が生み出した難問をすべて取り上げた」と書いています。このように多方面の才能に恵まれた文学学者であれば、現代との繋がりを築くことに問題はありません。鷗外が投げかけた難問はまだほとんど解決されていませんし、少なくとも今後五〇年は鷗外の展覧会のための材料や着想が種切れになることはないでしょう。

文学を「展示する」ことは、どの文学記念館にとっても、ほとんど解決不可能な難問です。すべて網羅するには空間が足りませんし、なによりも、文学の生命は著者と読者との親密な無言の対話にあるからです。文学館の見学もやはりこれまで個人的な出会いです。すべては、足を踏み入れる人の読書経験と人生経験次第です。その人は自分の心の問題に応じて、この場所と自分を関連付け、自分と比べてみるでしょう。来館者が展示資料をどのように受容するかは、もっぱら、その人のこれまでの教養と自己省察にかかっています。運がよければ、この空間で個人的な経験をし、自分と何かしらかか

わりのあることを発見して、入ってきた時とは違う人格として出てゆくことになります。これは、なにかのイベントに参加したり、受身でテレビ番組を見たり、バーチャル博物館を見学したり、インターネットの情報をただ傍観するより深い経験です。文学館では来館者が行動するのです。自分をしながら過去の自分を振り返り、とりわけ刺激を与えてくれる雰囲気の中で他者の鏡に自分を映してみなくてはなりません。「これから」のためには「これまで」がなくてはなりません。

また、記念館が長年に亘って活動を続け、興味深いプログラムを提供し続けた結果、日本人作家の文学記念館そのものが、他の文学作品の舞台になったり、作家にインスピレーションを与えていたこともあります。ベルリン森鷗外記念館は、今までに三作のドイツ文学作品、推理小説に登場しておらず、ある作品では主人公がリサーチのために記念館を訪れます(?)。これによつて、鷗外はドイツ文学中にも脇役として登場したと言えないでしょうか？ いずれにせよ、作家とのコラボレーションや講演会というのは、私たちのPR活動において大事な役割を果たしています。

教育・文化・スポーツ・科学技術省の統計によりますと、外国に留学中の日本人学生の数は、二〇〇四年から二〇〇九年までの間に二八%減少しています。知識を求めて外国に飛び出した明治時代のパイオニアの伝記は、今の日本の若者にとっても魅力的で、後を追いたいようなものでるはずなのです。

記念館というのはある意味、日本社会の変化と鷗外への興

に、と私はベルリンで気をもんでいました。けれども、私たちの記念館に坐りこんで、森鷗外のデスマスクと何時間も無言の対話をしている日本の青年を見るたびに、私の懸念は消え去り、「故郷を離れてこそ、遠い他郷で故郷を再発見することがありうるのだ」と思います。私自身ありとあらゆる回り道のスペシャリストで、故郷から遠い日本で初めて、自身についてさまざまことを知りましたので、こういうことは十分理解できるのです。

私どもの記念館では、開館時間中の来館者の八〇%は日本人です。ドイツ人は夜の催し物の方に多く来ますので、全体としては半半です。日本人の来館者は、当館の呼び鈴を鳴らず前に地球を半分まわってきてています。ここから、打ち解けた雰囲気の他に、ある特別な状況が生まれます。多くの人にたいして鷗外は「中仕切り」の意味を持ちます。ここに来た人は、「私はこれまで何をしてきたか、これからどこへ行きたいのか」と考え、日本人としてのアイデンティティを思い返します。他方、永年、一つの会社に勤めたあと、ようやく外国旅行もして、年金生活の自由を楽しんでいる人々は、鷗外が実生活の束縛にもかかわらず、つねに保ち続けた精神の自由に感心しています。来館者の数だけの鷗外観があります。だれもが自分の入口から入ります。「百の門を持つテーパイ」に木下奎太郎は鷗外をたとえましたが、百ではとてもききません。

味を図るパロメーターのようなものだと言えるかもしません。初期においては、観光バスでやって来るツーリスト団体が多く、ベルリンの壁が崩壊した頃にそのピークを迎えたが、現在では、グループ客は一年を通してみてもほんの一握りになりました。観光プログラムのタイトなスケジュールや、高価な旅費も団体旅行客が減った理由のひとつでしょう。その代わり、今では個人旅行をしている人々が記念館を訪れるようになりました。他人に頼らず、自分の興味に合わせて旅をする日本人が増えました。他人に頼らず、自分の興味に合わせて旅をする日本人が増えたのです。それは、家族的な雰囲気の記念館においては一目瞭然です。記念館にお客様が訪れ、館内を見て回る間、私たちもまたお客様たちを觀察しています。その様子は少し宮沢賢治の「注文の多い料理店」と似たところがあると言えるかもしれません。ですから、匿名性の高い受付で、訪問者が入場券を買って館内を見学する文学館よりも、私たちは訪問客がどのような興味を持っているか、詳しく知っているのです(8)。

近年のドイツ人、日本人のお客様の頭の中にどのような鷗外像があると思うか、要約せよといわれるなら、それは、信じられないほど天才的で、学ぶこと、創作すること、書くことに最高の満足を見出し、国家と言語の境界を、そんなものはないかのように飛び越し、そして何よりも、一人の人間としての究極の自由と喜びである、自ら考え自分の意見を形成することを決してやめようとしなかった人、ということになります。「鎖に縛られながらも踊る」ことのできた人の姿が詳しく述べられています。

鷗外は、考える自由を自分のためにだけ要求したのではありません。さまざまなお話を未解決にしておき、人に教えようとはしない、控えめな書き方をすることによって、鷗外は、急いで簡単すぎる答えを出すことを自分に禁じ、また今読んだことと自らが置かれている環境について、自力で考えてみるよう、読者を促します。鷗外の影響下にある間は、自分で考えようとしています。何週間も経つて、ようやく彼の言うことがわかつてくることもあります。

鷗外は「余裕の作家」で、ロングセラーです。いつまでも、少数ながら優れた読者を持ち続けるでしょう。ドイツでは森鷗外の文学作品の翻訳は二、三〇〇〇部しか刷られていません(9)。鷗外についての研究書が初版二〇〇部を越えることはめったにありません。もちろん図書館を通じてだれでも利用はできます。この事実を、文学記念館を訪れる人を潜在的な読者と想定して、人数を比較してみますと、記念館が集団

目に浮かびます。鷗外は実際はダンスが上手ではなかったのですから、これはむしろ比喩であって、狭苦しい実生活の条件と、精神面での自由、独創性、創造力が同時に存在しているということです。それはそれとして、翻訳者とはたぶん「鎖に縛られながらも踊る人」です。原文に縛られながら、しかも「asobi」のように優雅にしなやかに、今まで自分が考え出したかのように、目的の言語に移してゆくのですから。

的文化的な記憶に及ぼす長期的な効果が明らかになります。ベルリンでは来館者数は比較的少なく、日本の森鷗外記念館やその他の特別展で行なわれる、ドイツや日本の文学者の展示に来る人の数のほうが遙かに多いのですが、それでも、過去三〇年足らずの間に私どもが迎えたお客様の数は、同じ時期に売れた鷗外の本の数をずっと上回ります。概算してみると、開館以来の二八年間に、日本、ドイツ、その他世界中から来られた方々と握手し、鷗外に親しんでもらえるよう、三つの言語でお話を作っていましたが、その数は一二万人をはるかに超えます。たしかに、鷗外について私が知っていることはすべて、書物と、お客様との会話から学んだことです。わざわざ対立を作り出すことは無意味です。「当り前」のことですが、学問的背景のない文学記念館に価値はありません。書物と学問は、有能な記念館職員を育てる栄養素です。

それでも、少しは自負の気持ちをもって、挑発的な問い合わせてもよいはずです。もしこの二八年間、ベルリン森鷗外記念館が存在しなかつたら、今日のドイツ社会に鷗外についてわざわざでも知っている人がどれくらいいるでしょうか。しかも、博物館的な施設としてだけではなく、日本とドイツのさまざまな組織の仲介者として、また社会に開かれた学問の窓としても、機能してきました。私たちの記念館がなければ、ドイツでは鷗外は専門家以外からはほとんど忘れ去られていたに違いない、と私はあえて主張します。

もしベルリンに来られましたら、ちょっとテストをしてみて下さい。タクシーを呼んだら、鷗外記念館の住所を言う必要はありません。タクシー会社の電話オペレーターが知っています。新米運転手でも、自分の会社に訊けばいいのです。観光スポットとなっている連邦議事堂のガラス張りの展望ドームからは、当館の「鷗外」という大きな二文字を見ることが出来ます。鷗外記念館は、「ベルリン・イベントプログラム」でも大学と博物館のホームページでもみつかります。展覧会と講演会は「博物館ジャーナル」の定位位置に載っていて、ドイツ国外でも情報を見る事ができます。近年のドイツ語、英語の旅行ガイドブックでは、鷗外記念館は「hidden places(穴場)」として紹介されていて、それが訪問者の興味を更にそそるようです。生徒、大学生、青少年団体、教師や医師の団体がドイツからも日本からも定期的に訪れ、ベルリン以外での講演会や展覧会の活動もしています。

その一方で、私たちには注意が必要です。ある種の人気には浅薄化の危険が潜んでいます。そんな時、空想上の鷗外の宝を守る騎士になつたような気がします。たとえば二〇一二年のベルリン七七五年祭の時、八月以前のSchlossplatzで「多様性の都市」という展覧会が開催されました。展示されたのはベルリンの巨大な地図です。地図上の、過去のベルリンの生活に好影響を与えた外国人の住んでいた地点に、大きいピンを刺して示してあります。森鷗外という名はベルリンではよく知られていますから、地図作成者は、Luisen-

Str. 39 にもピンを刺して、鷗外を紹介するパネルを作ることを思つきました。パネルを飾る写真を求められたので、まず説明文を見せてもらいました。何も知らない実習生が、「森鷗外は日本人で、ドイツ文学をたくさん読み、ドイツ娘に恋をしたが、結婚は許されなかった、云々」。息が止まりそうでした。別の説明文を書いて渡して、最悪の事態は免れました。こういうことも記念館の仕事のうちです。助言者、調整者としての活動です。インターネットをどこまで相手にすることになるかは、未定としておきましょう。

世間が鷗外に注目するようになるために、マスコミと良い関係を築くことは重要なことです。残念ながら、記念館でイベントが行われる際に招待をしても、ジャーナリストが来ることは稀です。その代わり、鷗外や記念館が自分の取材のテーマになったとき、突然記念館のドアの前に立ちます。つい先日もドイツのジャーナリストが、鷗外訳『オルフェウスとエウリュディケ』の日本での公演について報じるため、出発直前に記念館を訪れたことがあります。しかし、彼は非常に忙しく、次のアボがあつたためすぐに行ってしまいました。後に私は新聞を読んで、鷗外が将軍であったとか、エロチックな小説を書いたとか、二十歳で三十歳ではなく医学博士の称号を得たなどといった間違いを見つけました<sup>(1)</sup>。彼が一体何處でそんな情報を探んだのか分かりませんが、「印刷したもののは、してしまった」(今更、回収のしようもない)わけで、

いうことは概してすぐに終わり、著者の本質的な要素である、用語、文章、言語、思想、遺産に向き合うようになります。また別の傾向として、ドイツでは最近、文豪をこれまでと違った視点から捉えようという動きが出ています。たとえばゲーテのような、従来は文学的創作活動を中心見られていた人物が、ヴァイマル国立博物館の新しい展示では、できるだけ多面的に、自然科学者でもあり首相でもあった人物として紹介されている、ということがあります。ゲーテ自身が、亡くなる数週間前に、「私の作品はある集団的存在の作品であって、その集団の名がゲーテなのだ」と書いています。ゲーテと鷗外という二人の文豪の間には明らかな並行関係が認められます。本年二〇一三年は、ゲーテの『ファウスト』第一部・第二部の鷗外による輝かしい翻訳が完成して一〇〇年になります。『ファウスト』はドイツの学校では必読書ですから、どれほど偉大な訳業を鷗外が短期間に成し遂げたかを、ドイツ人なられども身体で感じることができます。

ドイツ人は、何よりも鷗外の並外れた伝記に感銘を受け、天才である彼を深く尊敬することができます。

ドイツ人なられども身体で感じることができます。當時の時代性を素早く把握し、精神的に消化した上、驚くほどの早さで完璧な文体で翻訳を仕上げるということは、誰にもまねのできないことです。異文化間の仲介者、そしてアジアとヨーロッパの文化に対する深い知識をもち、双方を愛してやまないという彼の存在は、危惧されているハントティングの「文明の衝突」の時代にあって、一筋の希望の光でもあります。

鷗外の遺産を活かし続けることは難しい課題です。毎日新たに不安な気持ちで自分に問いかれます。私には、私の知識水準に見合った説明しかできないのだが、これでは不十分なのではないか。彼は我々の仕事を、デスマスクから微笑んで見下ろしてくれているだろうか、それとも、これはドイツ語の言い方ですが、悲しみのあまり墓の中で寝返りを打つてゐるのではないか。決定的な答えを見つけたなどと思ひ込んではいけないのでしょう。鷗外自身のように、「永遠の不平家」として行動し、自分の行為を何度も疑い続ける、そうすればつねに新しい道が見つかるでしょう。

このような環境で働くことは、言うまでもなく特權的なことです。鷗外の精神世界に生きていれば退屈することなどない、つねに新しい発見がある、と申し上げられます。望みはただ、読む時間がもっと欲しいというだけです。日々鷗外についての興味深い研究が発表されています。叶うなら記念館を何日かお休みにしてこれを読み込みたい。そして難しい学術的な内容を、やさしく噛み砕いて来館者の方達に伝えて行きたいです。

皆さまは、一五〇回目の誕生日のお祝いに、森鷗外のため何を祈ったのでしょうか。私が祈るのは、彼の作品がもつともつと翻訳されて、日本人以外にも広く読まれるようになること、彼の記念館が安定して存続し、確実なネットワークを形成すること、多くの人が、とりわけ若者が、鷗外とともに物事を深く考え、グローバル時代の潮流にたいする鷗外の

鋭敏な感覚から学ぶこと、そして、鷗外の残した未解決の疑問について学者の意見交換が行われることです。

さらに一番の願いは、鷗外全集のデジタル化です。最近では、鷗外に関する多くの記事——たとえば鷗外自身による鷗外文庫への書き込みや読売新聞の鷗外関連の記事などがそうですが——有難くもオンライン化されていて、ドイツでもすぐアクセスできるようになっています。ただ、鷗外全集のみ、自分の手で検索しなければなりません。予想もしない箇所にヒントが隠されていることもしばしばあります。全集をすべてを読むことは私たちには不可能ですし、最近来館した、あるカナダの学者から、「鷗外が栄養問題について意見を述べている箇所を全部教えてください」と言われたのですが、そのような場合に、その場ですぐに必要な箇所をすべて思い出すことなど誰にもできません。キーワードを入力してすぐ見つけられれば、「どんなに助かるでしょう。これはないものねだりのようなものだとわかつています。けれど、私がベルリン鷗外記念館の仕事を始めた時、備品は手動タイプライター一台だけ、コピー機すらありませんでした。確実なことは何一つありません。でも、すべては可能だと思います。

(1) このテキストは著者アーテ・ヴァンデが二〇一二年一〇月一日の東京鷗外サミットにて行なった講演原稿(記念日と記念館について)を加筆修正したもの。サミットでの講演時間は限られていたため、原稿は大幅にカットせざるを得ませんでした。

(2) 一九九三年の森鷗外記念基金の設立時に日本の外務省から「駐在外大使」のベルリン森鷗外記念館に、一五〇〇〇マルク(約七五〇〇ユーロ)の一時金助成がありました。さらに、日本側から寄付が集まりましたが、基金に集められたお金では記念館の賃貸料も払えないのが現状です。毎年一〇〇、〇〇〇ユーロに上る維持費は全て フンボルト大学が負担しています。

(3) 北里はのちに衛生学研究所において正式に助手として雇われ、プロイセンにおいて初めて、プロフェッサー(大博士)の称号を得た外国人となりました。

(4) 鷗外がドイツに来た年から一〇〇年を記念して。

(5) この文化協会により記念館の職員の座が設けられました。記念館を運営するため、一九九〇年まで私は文化協会に雇われており、それ以降はフンボルト大学が私を唯一の記念館職員として雇っています。

(6) 記念館は一九八六年に創立されたドイツ文学協会・文学館連盟(A-LG)のメンバーで、この連盟には約二五〇団体が加入しています。その中にはシェイクスピア、ダンテ、ドストエフスキイ協会などがありますが、そのうちのどれも、ドイツ国内に文学館や博物館を有しています。

(7) Norman Ohler: *Mitte. Rowohlt*, Berlin 2001.

Jürgen Ebertowski: *Blutwäsche. Rotbuch Verlag*, Berlin 2009(ノーリハ推理小説賞受賞)

Jürgen Ebertowski: *Die Stadt am Meer. ベルリン 鎌倉物語*. Schärdt Verlag Oldenburg 2012.

参照 Tsunekawa Tako/Beate Wonde: "Ôgai als Geist in 'Mitte' von Norman Ohler", *The Journal of Humanities, Meiji University*.

Vol. 10, March 25, 2004, 26-40.

(8) 三五冊に及ぶ記念館のケストバックには、日本人訪問客による鷗外への印象と考究者が書き込まれていて、鷗外の受容とどうテーマにおいてヒントが沢山隠されています。外国に滞在しているからこそより個人的に、より詳しく書き残していくのかもしれません。

(9) 現在ドイツの書店で手に入れられる作品は「舞姫」「独逸日記」「雁」に限られています。

(10) Peter von Becker: *Tokio-Modell. Tagesspiegel* 3. November, S.3.

(11) Vgl. Hijiyaka-Kirschner, Irmela: *Horizonte. Narrative Ausgriffe auf Berlin in der japanischen Belletristik. Katalog der Ausstellung "Berlin-Tokyo Tokyo-Berlin/Die Kunst zweier Städte"*, Hatje Cantz, Berlin 2006.

(12) 参照 ハベマ Reiss-Engelhorn Museen にて開催された特別展 "Ferne Gefährten—150 Jahre deutsch-japanische Beziehungen" によった記事。ムートー・カオハド "Mori Ôgai (1862-1922) und der deutsch-japanische Kulturtransfer" Curt-Engelhorn-Stiftung  
Reiss-Engelhorn-Museen 2014 Verband der Deutsch-Japanischen Gesellschaften のために書かれたもの。Publication der Reiss-

鈴木範久

# 内村鑑三の人と思想

「普遍」を掲げる思想を抱いて日本近代を駆け抜けた、稀有名な精神の軌跡を描く本格評伝。「キリスト愛国」の理想と挫折、一高不敬事件以後の回心、終末論的再臨思想……

難問から逃げず、常に変わり続けた「当たり前」の生涯を描く。

岩波書店

つれづれなるままにというタイトルは、私の師であるユルゲン・ペルント教授との思い出により選んだものです。ペルント教授は鷗外と同じく六十歳で亡くなり、今も生きていれば今年で八十歳になります。彼の死後に発表された最後の翻訳は「舞姫」と「徒然草」でした。

(2) 一九九三年の森鷗外記念基金の設立時に日本の外務省から「駐在外大使」のベルリン森鷗外記念館に、一五〇〇〇マルク(約七五〇〇ユーロ)の一時金助成がありました。さらに、日本側から寄付が集まりましたが、基金に集められたお金では記念館の賃貸料も払えないのが現状です。毎年一〇〇、〇〇〇ユーロに上る維持費は全て フンボルト大学が負担しています。

(3) 北里はのちに衛生学研究所において正式に助手として雇われ、プロイセンにおいて初めて、プロフェッサー(大博士)の称号を得た外国人となりました。

(4) 鷗外がドイツに来た年から一〇〇年を記念して。

(5) この文化協会により記念館の職員の座が設けられました。記念館を運営するため、一九九〇年まで私は文化協会に雇われており、それ以降はフンボルト大学が私を唯一の記念館職員として雇っています。

(6) 記念館は一九八六年に創立されたドイツ文学協会・文学館連盟(A-LG)のメンバーで、この連盟には約二五〇団体が加入しています。その中にはシェイクスピア、ダンテ、ドストエフスキイ協会などがありますが、そのうちのどれも、ドイツ国内に文学館や博物館を有しています。

いまやん。